当面のスローガン

- 本年こそ「人権侵害救済法」を制定させよう！
- 狭山再審闘争の勝利をかちとろう！
- 続発する差別事件の糾弾を徹底しよう！

解放新聞 和歌山版

発行所
解放新聞和歌山支局
〒640-8314
和歌山市神前 405-3
TEL 073-473-2301
FAX 073-473-2302
発行責任者
藤本哲史

活発な議論を交わし 仲間の絆と友情を

第49回全高 第61回全青

〈スローガン〉
ひろげよう仲間の輪！
深めよう仲間のきずな！
差別と戦争をゆるさない社会をつくろう！

部落解放第49回全国高校生集会・第61回全国青年集会を8月19日・20日、群馬県みなかみ町観光会館でひらかれ、全国から約500人が参加し、和歌山県連から高校生15人、青年23人、引率・事務局の4人が参加した。

はじめに、主催者を代表して組坂繁之・中央執行委員長は「この群馬県みなかみ温泉で第48回全国高校生集会及び第60回全国青年集会が、全国の仲間の絆と友情を深める集会となるよう、活発な議論と交流を」とあいさつした。つぎに、地元歓迎あいさつとして、荻沢滋・群馬県副知事から「全国の高校生や青年が群馬の地に結集したことは、大変よろこばしい。本集会が活発な意見を交わす場となることを祈念する」とあいさつした。つぎに、集会スローガンが提案され、全体集会が終了した。

全高・全青であいさつする組坂繁之・中央執行委員長

つづいて、高校生・青年が第1から第5分科会にわかれ、議論を交わした。

第1分科会では「部落問題入門」を近畿ブロックが運営し、各地域の部落産業の歴史の報告やスゴロクトークをおこない、2日目はぞうりづくりをおこなった。第2分科会では、「冤罪・狭山事件54年～狭山闘争と部落解放運動」を関東ブロックが運営し、安田聡（狭山闘争本部事務局次長）から狭山事件の経緯について説明があった。第3分科会では「高校生と部落解放運動」～しろう・はじめよう・つながろう～を四国ブロックが運営し、高校生からの活動報告をもとに、高校生同士での意見交換や交流をおこなった。第4分科会では「自分のライフスタイルから解放運動を考えてみよう」～仕事・家庭生活・子育て・運動～を九州ブロックが運営し、自分のライフスタイルバランスについて意見交流された。第5分科会では「反戦・平和・時事問題」を広島県連が運営し、戦争についてさまざまな意見を出しあい意見交流した。参加者から「しっかりと議論をすすめるため、高校生・青年をわけたこれまでの集会にもどしてほしい」などの意見がだされ、集会を終えた。

実効性ある人権の法制度確立をめざし

実行委員会総会

部落解放・人権行政確立要求和歌山県実行委員会第29回総会が8月10日、プラザホープでおこなわれ、実行委員会構成団体から約150人が参加した。「推進法」制定後はじめての総会で、法律の具体化にむけたとりくみをすすめていくとともに「人権侵害救済法」制定をめざして、さらなるとりくみをつづけていくことを確認した。

さらなる行動を訴える田上武・会長

冒頭、主催者を代表して田上武・部落解放・人権行政確立要求和歌山県実行委員会会長が「推進法実現にいたるまで、みなさん方の多大なるご協力をいただいた。内容については不十分ではあるが、この法律をいかすためには、私たちの行動が重要になってくる。今まで以上のご尽力をお願いしたい」とあいさつした。

佐藤教授から、被害者の救済の重要性が語られた

また、藤本哲史・執行委員長は「人権侵害救済法にはいたらなかったが、部落差別をなくしていこうという法律が制定された。実行委員会でこの法律を具体化させていくため、それぞれの団体で勉強していかなければならない」とのべた。

来賓である宮地良治・県人権局長、山下勝則・和歌山市市民部長の祝辞のあと、宮本修作・同実行委員会事務局長が基調をのべ、今年度の役員が確認された。

つづいて、佐藤佳弘・武蔵野大学教授が「インターネットと人権侵害」と題した記念講演をおこない、現状ではインターネット上での人権侵害、さらし行為を禁止する法律がないこと、そのなかで被害者の救済のためにしなくてはならないこと、そのために必要なことなどをわかりやすく講演し、盛会のうちに閉会した。

頑健

先日、テレビで「ハイサイおじさん」にまつわる秘話が放映されていた。喜納昌吉さんのレコード・デビュー曲。1972年に沖縄が日本に返還されて4年後の作品▼喜納は青年期、琉球民謡歌手の父の影響をうけながらもロックにはまっていた。ちなみに琉球民謡は、レとラをのぞく5段階で構成されており、これが独特の世界観をつくりだしている。喜納は、これにロックを重ねてできたのが「ハイサイおじさん」である▼底抜けに明るい曲だが、モデルになったのが隣家のおじさんである。彼は若いころ教員をし、沖縄の地上戦、米軍の占領下を生きてきたが家族におこった惨劇の果てに「村八分」にされていった。そんなおじさんを励ますつもりで書いたという。実は、沖縄の悲惨な歴史と喜納の戸惑いがベースにある▼この「ハイサイおじさん」は、アメリカの曲のコピーをしていた本土の多くのミュージシャンに衝撃と影響を与えた。もちろん、沖縄の若者たちへも▼その後も喜納は、次々と曲を発表し演奏をつづけた。基地への批判と沖縄のアイデンティティをベースにつくられるそれらの曲は、常にどこかで尖っていた▼しかし、喜納の思いは、世界60カ国で3千万枚以上を記録している「花～すべての人の心に花を」に託されている気がする。…「すべての基地に花を咲かそうよ」と。

（S・I）